

[履修コース]

EDU795-01 Special Topics

EDU761-01 Individualizing Instruction for Students with Special Needs

EDF730-01 Multicultural Foundations of Education

LIN701-01 Intro to Phonology Theory

LIN702-01 Introduction to Syntactic Theory

[EDU795-01 Deaf Culture, people, and community]

米国では一般に、バイリンガル (Bilingual Method) というと、スペイン語×英語、または中国語×英語といった組み合わせがあるが、そのアプローチのほとんどは English Second Language approach(ESL)である。しかし、ろう者のバイリンガルというと、その一般のバイリンガルとは、「第一言語が手話 (visual language)」という点で異なった意味内容を持つことになる。つまり、アメリカろう者にとってのバイリンガルアプローチとは、American Sign Language を主な媒介言語として、書記英語へと移行していくことであり、その言語モードを Sinacy という。ただ、具体的に、いかに、どのような手段を用いるのかといった教授法を含めた内容は別のコースとなり、来年の秋学期に履修予定である。討議でなぜ手話にメインをおくのか、手話がなぜろう者の自然言語として捉えられるのかという題材で話し合う機会があったが、「ASL」というひとつの言葉の定義にしても、人それぞれに捉え方が異なっていて、それによって全体的なバイリンガルメソッドに対する見方も異なってくるから、興味深い。

最近では、音声学を幼児期の特定期間内に学んだろう児はリテラシー能力がすぐれているという研究結果があり、それが、どれだけバイリンガルアプローチに影響を及ぼすのか、具体的には、リテラシー能力の向上の為にどれだけの英語言語モードを導入するのが、これからの研究題材になるであろう。

また、アメリカのろう教育の歴史、また教育法、ろう者の生活とその関わりを学ぶ事によって、これまでのアメリカのろう教育歴史の背景、文化、またそ

の精神に触れる事ができた。また、なぜ、これからのろう教育には、バイリンガルメソッド (Bilingual) のみではなく、バイカルチュラル (bicultural) があるのかは、アメリカのこれまでの歴史とろう教育アプローチ法を見れば、一目瞭然である。また、Multicultural Foundations of Education の報告でも触れているように、これまでのろう教育の中で行われてきた教育アプローチは、ろう者の言語が無視されてきただけでなく、その文化、価値観そのものも否定されつづけてきた。本来ならば、教育機関と家庭と地域とで育まれるべきである自己アイデンティティ、またその文化、価値観が正常に育まれないことは、それだけに、個人に、またそのアイデンティティに強い影響を与える。だからこそバイカルチュラルである。

また、月間レポートでも短くふれたが、レポートの一環として、Community service project というのがあり、それを通して、実際の現場で Bilingual Bicultural Method の雰囲気を感じたこと、またそれらを通して Kendall Demonstration Elementary School (KDES) との関わりが出来たことも大きな収穫である。

つくづく思うが、ろう者はコミュニケーション障害をいう別名があるように、他の人と仕事をするという行為、そのものが苦手である。プロジェクトを進めるには、かならず他の人とコミュニケーションをする力が必要不可欠であり、またこのプロジェクトを通して、どのように自分のアイデア、力量を発揮していくかを考えていくのもこのプロジェクトの面白みであった。

Deaf community というと、抽象的で、その定義は広範囲ではあるが、私たちのプロジェクトには、例えば、deaf community に強い関わりを持つ団体や、その活動、また学校を含める公機関での active works などが挙げられる。次に、メディア、テクノロジーを媒介した、映画や、取材など、社会にたいするアピール活動などが目立った。日本ではなかなか見られないこの行為、日本でなかなかろう者への注意がいけないのは、「気持ちを押し込む」という日本の文化に関係があるというのはあながち嘘でもないかもしれない。

また、全体的に歴史を見た時に、改めて、日本のろう教育は、色々な意味で

アメリカからの影響を強く受けているとそう感じる。これからは、その関わりを大切にしたいうえで、日本のろう教育が抱えている諸問題の解決をめざしていくことが大切だとおもう。

EDU761-01 Individualizing Instruction for Students with Special Needs

ろう教育は特別教育の一部であるのにも関わらず、ここアメリカでは、ろう教育だけに注意がいきがちで、ろう×自閉症、ろう×発達障害などのしょう害を併せて持っている子ども達への対応がおざなりになりがちである。このクラスではろう／難聴児だけでなく、その他しょう害を併せて持つ児童たちへのアプローチ、設備の充実、またクラス内での配慮を中心に学んだ。また、個人計画書（Individual Education Plan (IEP)）の作成方法にも触れた。

最近の研究では、ろう児には聴力障害だけでなく、その他の障害を併せ持っている可能性が、健常児よりも高いことがわかっている。その主なしょう害分類としては、情緒的行動障害（Emotional Behavior Disorder）、また学習障害（Learning Disability）がある。

クラス内で様々なしょう害名とその特徴を学んでいくうちに、いかにろう児の重複しょう害が、学校で見落とされがちなのか、また社会からの、情緒的行動障害、学習障害への理解、認識度がいかに低いかを実感した。とくに近年のメインストリーム児の増加は、その傾向を助長している傾向にある。

昨年のものであるが、Ohlone 大学に通っていたときに、ひとりの友人が、入学後、学習障害であることが解って、ひどくショックを受けていた。いままでそのような話しは無かったのかと不審におもい、聞くと、健常学校に通っていたという。彼は今まで自分が英語を読むのに苦勞するのは耳の所為だと思っていたらしい、というか、周りが、そう言い続けてきたのだろう。今年24歳になる彼は今後、週一の行動療法を受けるという。このまま学習障害が発見されないままだったら？と想像するとぞっとする。

このケースのように、重複しょう害であるのにも関わらず、聴力しょう害だけに集中してしまい、きちんと、そのろう児の必要に対応出来ない事が、たま

にだが、ある。日本でもしかり、このようなケースはどこにでも起こりうることであり、専門者でも間違えることがあるのだ。だから教師は、きちんとそれぞれのしょう害の特徴、またそのろう児の普段の行動をきちんと観察しなければならないし、その責任をきちんと担っていかなければならない。またろう児が、重複しょう害児として分類されるまでのプロセスには、学校側、また親側との関わり方次第で、複雑にこじれてしまうことがある。順調なプロセスの為には、親側と学校側が、きちんと、そのろう重複しょう害児の為に、何が一番いいのかを話しあうことはもちろん、必要不可欠ではあるが、個人指導計画書をフル最大限に活用していく技術も同時に必要である。

思い起こしてみれば、日本にいた時、個人指導計画書というと、文面のレポートという感じでおわっていて、どちらかという義務的な作業という感じで、本来の個人指導計画書の良さを有効に使い切れていなかったようにおもう。計画的で、かつ教師にとっても、両親にとっても益のある個人計画書の作成は、本来の目的と全体的なビジョンと、計画性がなければ作成できない。このクラスで学んだことは、今後、現場で役立つだろう。

アメリカの良さ、強みは **Coordinated assessment service** であり、学校、教師が、精神科、心理学、神経科などの各専門家の人達と連携して、専門的に個人の子どものしょう害をアセスメントしていける所だ。教育機関、地域、医療機関から包括的に一人の児童をサポートしていくという方針があるからこそ、個人計画書の意義がある。

EDF730-01 Multicultural Foundations of Education

日本ではなまじ馴染みのうすいこの科目であるが、他民族国家であるアメリカでは、教員養成講座、またはスクールカウンセラーの必須教科の一つであり、重要な科目である。また、**Multicultural Education** というのは、クラス、性、性教育、民族、宗教の多様性、障がい、言語学など様々な視点から少数民族に属する子どもへの対応、多種多様な背景をもった生徒達への教育を考えるものであり、つまりは、多文化的教育、つまり他民族の多文化共存／融合である。

しかしながら、ろう者がこの少数民族の中に加えられた事はなく、アメリカ

でも、ろう者を文化的視点から捉えていく見方に対する認識はうすい。前に月間報告でも触れたが、2009年4月、CaliforniaのSan Diego State UniversityのJohn. R. Johnson、Angela S. McIntoshは、アメリカの特別教育機関にmulticultural educationの少数民族のリストにろう文化(deaf culture)を加えるべきだと申請しており、この出来事はある意味で印象に残った出来事である。Multicultural Educationのテキストにろう文化という言葉を見る日もそう遠くないのかもしれない。

多種多民族といっても、それらの多くは白人であり、その次にくるのは、有色民族(colored people)である。アメリカには、アフリカンアメリカンからラテン、インディアンアメリカン、そしてアジアなどの移民族が存在しているが、彼らの多くが文化差異による葛藤、社会からの偏見、言語の習得、また自己アイデンティティといった問題をかかえている。少数民族だけに見られるこれらの様々な問題は、ろう児にも見られる傾向である。

また、月間報告でも触れたように、文化差異によって、個々の学習に差が出るというthe cultural mismatch theoryは、貧富格差や、劣等遺伝子などのセオリーよりも、現場の教師達にとって、確実な目的、方向性をもって、取り組みやすいセオリーの一つである。ただ、具体的にどういった方法をつかって、という実践的な面になると、それは学校の趣向、また州のカリキュラムによって異なってくる。また学校内でmulticultural classがどういった位置にあるのか、また教師個人のクラスに対する意欲にもかかってくる。しかし、文化を理解するということと、実際にクラス内で様々なアプローチ方法を取り入れていくということは、全く別のものであり、クラス内での取り組みだけでなく、学校全体が積極的な姿勢をもって、様々な文化を学ぼうという取り組みも必要である。

LIN701-01 Intro to Phonology Theory

ASL Phonologyといえば、Dr Robert Jhonsonであるのは有名であるが、その彼が教鞭を執っているこのクラス、とても興味深い講義であった。私のもっている知識といえば、日本にいたときに音声学をちょっとかじった事のある程度、一気に専門用語を英語で並べられると、にげたくなる。主な内容としては、

音声学、音素論、音声体系の過程、ルール、音節と弁別的素性の分別、また様々な音声学のセオリーである。セメスターの後半では、IPA をつかって音韻表記にあるルールを見つけ出す作業に集中した。このクラスは **ASL Phonology** をとる前に取らなければならないクラスであり、仕方なく取ったものの、視覚的に音声学のルールや、いままで、なんでこうなるのだろう？と理解し難かった音声英語に対するルールなどが、はっきりと理解できたことは、一つの収穫である。

ろう児のリテラシー能力の向上には音声学を知識として、覚えておく事が有利だという話があるが、改めて自身の経験をもって、実感したクラスである。このセオリーから見れば、聾学校で実行されていた英語レターの上にふられるカナ、あながち効率的なのかもしれない。しかし、音声英語の理解には時間がかかりがちな、ろう児にとっては、時間的にいえば、やはり、メインアプローチとして使うべきではない。あくまでもサブアプローチとしてであろう。

LIN702-01 Introduction to Syntactic Theory

一般入門 よく知られている原理と基本要項、また言語学内で50年間、研究されてきた統語論の主要構想が内容である。基本的なセオリーから応用編を使って、構文法問題が解けるようになること。また、このセオリーの実践に基づいて、基本的な手話の研究についても触れる。

興味深い事に、構文法問題に対する見方が健常者生徒と私の間で、かなり違う。基本文などまでは健常生徒もある程度まで、理解していけるのだが、接続詞や、**Head-to-Head Movement** とかというレベルになると、難解問題であるという。それに比べ、私のほうはといえば、一回ルールを理解すると、すんなり解けていけるので、やはりろう者は文法を覚えていくという教育をうけてきたという自分の背景を実感せずにはいられない。

ろう児の英語教育について考えたとき、ろう児には文法教育がいいというが、やはり健常児のように、自然な流れで英語を習得する方法はないものかとおもう。いかに時間はかかっても、言語習得への負担は軽いほうがいい。

春学期にはこの syntax のクラスに引き続き、ASL syntax を学ぶ予定である。全体的な二つの言語、英語とアメリカ手話の違いが見えたとき、自分の学びたいエリアというものはっきり見えてくるのではないかと、おもう。

Gallaudet 大学に入学して

学校という場所は、学問だけに限らず、様々な人達との出会いを通して、人間的に成長出来る場所である。そういう意味で Gallaudet 大学は、プラスマイナス面でも、個人の経験に大きな影響を与える。とくに、聾者にとって、全ての人達がろう者という環境は、「ろう」に対する見方、捉え方を含め、これまで培ってきた感覚、日本の見方とは全く異なっているであろうし、それが個人にプラス、マイナスに働くかは、まったく本人次第である。この過程を通して、人間として、ろう者として、成長していくまでのその過程、葛藤は、人それぞれであり、その内容は本人しか解らないこともあるであろう。

人がこれまでとは全く異なった社会にショックをうけ、アイデンティティ崩壊期、そして統合作用期、この二つを繰り返しながら、留学生としてのアイデンティティを確立させていくというのは、留学生ならば、一度は経験することであるが、ろう者の場合は、一般のいう個人アイデンティティ崩壊だけでなく、「ろう者」としてのアイデンティティに悩む時期がある。自分なりに「ろう者」であることを、受け止め、消化していくのにかかる時間は人それぞれであるとは思いますが、要するに、こういったろう者ならではの葛藤、そういう時期があるということだ。この傾向は、Gallaudet 大学に通う留学生だけではなく、アメリカ人ろう者にも見られる。特に高校を卒業したばかりの聾学生は、こういった心理的葛藤による反動行動作用が激しい。Deaf Education ならアメリカと言う人がいるが、こういった傾向を並べてみると、アメリカ人も、留学生も、高校教育までは、「ろう者」としての成長出来る場所があるかないかという面であまり大差がないと思う。

Gallaudet に行くと、様々なろう者に出会ったり、その新たな出会いを通して、学ばされること、またその内容は貴重である。なぜなら、この内容を通して、偏狭な考え方や、かたよった見方を知らず知らずのうちに身につけてしまっている自分を発見することもあるからだ。

例えば、電話のできるろう者を見た時に「あ、難聴者なのだな」と、とっさに思う。理論ではなく、無意識に、そう思う。なぜなら、「この人は耳がいい」＝「電話ができるぐらいに」という構想的な理解があるからで、さらに、それによって「電話ができる」＝「手話がうまくない」という公式も瞬時に浮かび上がる。なぜなら、残音聴力のある人にとって音のあるなしというのは、個人が思っている以上に、残聴力の無い人と比べ、言語の習得に大きな違いがあるからだ。こういう風に私の中で、もうすでに立てられた仮定を元に、「残存聴力を活かしたコミュニケーション方法」＝「手話がうまくない」という公式が自動的にあるのである。

しかし、私が出会ったその「難聴者」は例外の例外であった。デフファミリーで、手話がものすごく上手だったことは、私を十分に驚かせたが、さらに驚かされたことは、「ろう教育に音楽教育は必要である」という、ろうコミュニティーにからは、100パーセント異論を受けそうなテーマで、セオリーを書く予定であるという。

こういう風に Gallaudet には、「ろう者の常識／ろうコミュニティーの常識」を覆す出来事がたくさんある。

そういう意味で、教育者として、現代のろう者像、そのものを具体的にではあるが、かいま見る事ができたこと、様々なろう者、また同じように教師を志しているアメリカろう者と色々な話しが出来ることは、将来につながられるであろう。ろう者にとって、ここは出会いの場所であり、また自分自身がどこから来たのか、自分が何者であるのかを、改めて見つめ直すことのできる場所でもあるだろう。